

千葉県八千代市

埋蔵文化財発掘調査報告集

1987・3

八千代市教育委員会

例　　言

1. 本書は、八千代市内に所在する下記にあげる7遺跡の発掘調査報告と下記にあげる3古墳の測量調査報告をまとめたものである。
2. 本書の執筆は分担執筆とし、第Ⅰ章1を山岡寛人氏へ依頼し、第Ⅰ章2を朝比奈竹男が、第Ⅱ章2・3・6・7を秋山利光が、第Ⅲ章1・5を森竜也が、第Ⅰ章3、第Ⅱ章4、第Ⅲ章1・2・3、第Ⅳ章を藤茂美があたった。
3. 遺跡調査・測量調査による遺物や図面は、八千代市教育委員会が所掌し、八千代市文化財整理室と八千代市北部遺跡調査会事務所に現在保管している。
4. 調査にあたって地元の方々の御協力、御助言を賜わり御協力を得た。この場を借りて謝辞を述べたい。
5. 発掘調査及び測量調査を実施した遺跡と期間は次のとおりである。

村上宮内遺跡	昭和60年12月16日～昭和61年1月8日
吉橋城址	昭和61年11月15日～11月22日
村上新山塚群	昭和58年12月5日～昭和59年1月17日
大山遺跡	昭和59年11月12日～11月29日
下高野作畑遺跡	昭和61年3月5日～3月17日
桑納遺跡(第Ⅱ次)	昭和60年2月26日～3月30日
青柳台遺跡	昭和60年1月30日～2月4日
佐山台遺跡	昭和61年5月
田原塚古墳	昭和61年5月
下高野新山古墳	昭和61年8月と11月

目 次

例 言

目 次

第Ⅰ章 八千代市の地形と遺跡

- | | |
|------------------------|----|
| 1. 八千代市の地形の概要..... | 2頁 |
| 2. 八千代市の遺跡立地..... | 4頁 |
| 3. 本書掲載の遺跡群の位置と立地..... | 6頁 |

第Ⅱ章 遺跡調査の概要

- | | |
|-------------------|-----|
| 1. 村上宮内遺跡..... | 7頁 |
| 2. 吉橋城址..... | 10頁 |
| 3. 村上新山塚群..... | 14頁 |
| 4. 大山遺跡..... | 19頁 |
| 5. 下高野作畠遺跡..... | 22頁 |
| 6. 桑納遺跡（第Ⅱ次）..... | 25頁 |
| 7. 青柳台遺跡..... | 28頁 |

第Ⅲ章 測量調査の概要

- | | |
|-----------------|-----|
| 1. 佐山台古墳..... | 31頁 |
| 2. 田原窪古墳..... | 31頁 |
| 3. 下高野新山古墳..... | 33頁 |

第Ⅳ章 小 結.....

挿 図 目 次

- | | |
|--------------------|-----|
| 第1図 八千代市全城図..... | 1頁 |
| 第2図 村上宮内遺跡実測図..... | 8頁 |
| 第3図 吉橋城址地形図..... | 12頁 |
| 第4図 吉橋城址実測図..... | 13頁 |
| 第5図 村上新山塚全測図..... | 16頁 |
| 第6図 村上新山塚実測図..... | 17頁 |
| 第7図 大山遺跡実測図..... | 21頁 |

第8図	下高野作畠遺跡実測図	24頁
第9図	桑納遺跡（第Ⅱ次）実測図	26頁
第10図	青柳台遺跡実測図	29頁
第11図	佐山台古墳測量図	32頁
第12図	田原窪古墳測量図	34頁
第13図	下高野新山古墳測量図	35頁

図版目次

図版1	村上宮内遺跡 トレンチ完掘状況・土層	41頁
図版2	吉橋城址 航空写真	42頁
図版3	吉橋城址 近景・土層	43頁
図版4	吉橋城址 発掘風景・空堀及土壁	44頁
図版5	村上新山塚 発掘風景・トレンチ完掘状況	45頁
図版6	村上新山塚 近景・大山遺跡 第6号住居址確認状況	46頁
図版7	大山遺跡 近景・完掘風景	47頁
図版8	下高野作畠遺跡 近景・第3号住居址確認状況	48頁
図版9	青柳台遺跡 近景・住居址確認状況	49頁
図版10	佐山台古墳 近景（東南側より）・近景（南側より）	50頁
図版11	田原窪古墳 近景（東側より）・近景（西側より）	51頁
図版12	下高野新山古墳 近景・周溝確認状況	52頁

八千代都市計画基本図



第1図 八千代市全域図 (1 : 50,000)

0 1000 2000 M

第Ⅰ章 八千代市の地形と遺跡

1. 八千代市の地形の概要（第1図）

千葉県八千代市は関東平野のほぼ中央に位置する。市域の大半は千葉県の北部に広がる下総台地に覆われ、かつて小河川によって台地に樹枝状に開析された谷は100～200mの幅をもち沖積低地としてそのほとんどが埋められている。この開析谷の中央には河川が流れる。市域における主要な河川は、市域の北部を北西から南東へ流下する神崎川、市域の中央部を北から南へ流下する新川、市域中央部を西から東へ流下する桑納川、市域南部を南東から北西へ流下する勝田川、同じく市域南部を西から東へ流下する高津川である。

下総台地は、関東平野に分布する武藏野台地・大宮台地・常陸台地などの諸台地と同じ時代に形成された。地形的には一部、河岸段丘を交えるが、大半は下末吉面と呼ばれる海岸段丘である。

市域における台地の海拔高度はほぼ20～30mで、最高点は南西部に広がる陸上自衛隊習志野駐屯部隊演習場内の39.1mの地点である。なお、海拔高度の最低点は市域北東の神崎川と新川との合流点付近の氾濫原の1.1m地点である。おおまかに言うならば台地の高度は南西部が高く、北東部に向けて徐々に高度を減じていく。

八千代市における地形・地質の調査研究は緒についたばかりであるが、いくつかのことが明らかになってきた。

市域の露頭に於いて観察される最下位の地層は上岩橋層である。この上に、木下層・常総粘土層・武藏野ローム層・立川ローム層の順に地層をのせていく。このうち上岩橋層・木下層は古東京湾によって堆積された海成層である。

市内桑橋での調査結果を概観しよう。

上岩橋層はよく縮まった灰白色の細砂の層で、ゆるやかなクロスラミナが見られる。また、ヒメナホリムシの道い跡生痕化石を含む。木下層とは不明瞭な不整合面で接する。木下層の最下部はクロスラミナが発達するが、次第にシルト混じり中砂に変わり、鉄錆色に汚れた部分にはバカガイ・アサリの印象化石を多量に含む。この部分には平行ラミナが見られる。さらに黄褐色砂混じりシルトが続く。木下層の最上部は黒色の植物痕を含む。この部分にはラミナは見られない。

常総粘土層はほぼ2mの厚さを持ち、露頭ごとに多様な様相を呈する。常総粘土層下部の層相分布は次のような特徴を有する。市域西部に隣接する船橋市大穴・古和釜・坪井（この地域は桑納川の上流域に当たる）では粘土質でクロスラミナが見られない。市域で同様な層相を呈するものは市域南東部の大和田・勝田である。市域西部の寺台・桑橋、さらには市域北部の佐山・平戸・

神野から中央部の島田・米本・麦丸・村上・萱田といった具合に市域の大半では砂質でクロスラミナが見られる。また、市域北西部の小池では粘土質でクロスラミナの見られない層相を呈し、市域北部に隣接する白井町・印西町にひろがる層相と連続する。

一方、桑納川地域における常総粘土層の海拔高度分布を見ると、次のようにある。船橋市大穴・古和釜・坪井では22~24m、八千代市寺台・桑橋では18~19m、平戸では16mである。

これらのことより、最後の氷河期の訪れにより古東京湾が陸化する過程で、砂質でクロスラミナの発達する常総粘土層下部を堆積した市域の寺台・桑橋・佐山・平戸などは蛇行する河川の氾濫原あるいは沼沢地で、これを取り巻く船橋市大穴・古和釜・坪井あるいは白井町・印西町などは後背湿地であったという古地理を想像できる。

さらには、常総粘土層を堆積した時代から現在に至るまでの間に、市域南西部では相対的な隆起運動、北東部では沈降運動が行われたことを示す。このため桑納川をはじめとする市域の諸河川は基本的には南西から北東へ谷を開析し、谷筋を固定し始めたと考えられる。現在見られるこれらの河川の支谷が等高線に垂直であるのはこのためであろう。

また、常総粘土層の高度分布により桑納川北岸、市域の萱田・村上・下高野に小さな隆起帯が認められ、この隆起帯に挟まれた溝状の凹地に桑納川など諸河川が流れる。これらの谷筋は等高線に平行で、支谷から集めた水により深く開析するとともに、地殻変動による谷筋の変更もかかり、河岸段丘を形成していったのだろう。河岸段丘については現在のところ詳細に調査されていない。

常総粘土層の最上部は乾燥を示す化石土壌であるチョコレート粘土が見られ、その上を5万年前に堆積した東京軽石層が覆う。さらにこの上を武藏野ローム・立川ローム層（上部は2万年前に堆積）が覆う。

沖積地は1万年前の洪水時の礫・樹木の破片などの堆積に始まり、5千年前にピークを迎える縄文海進による海底に粘土層の堆積、3千年前の海退を経て形成された。

地形・地質研究の進展と遺跡の調査研究との関係が検討されることを期待したい。

参考文献

- 佐々木茂・宮垣津繁・長崎正・谷地隆「八千代市の地形・地質」、「八千代市文化財総合調査報告書 I」、24~38P、八千代市教育委員会 1981
八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史 資料編 自然 I』、八千代市1986（クロスラミナ等の用語に関する説明を含む。）

2. 八千代市の遺跡立地 (第1図)

はじめに

八千代市は下総台地北西部に位置し、印旛沼の南西端にわたる地区である。市の面積は約52km²であり、遺跡は270余（註1）を数える。市の南部については宅地化や工場地域として、北部については農業地域と大体地区によって土地の利用が区分されるが、山林の荒廃や開発の増加によって遺跡も確認しづらくなっている。

ここでは八千代市における遺跡の立地について若干触れてみたいと思う。

1. 地理的環境の概要

八千代市は水田面で0～12m、台地上で14～35mを測る比較的標高差のない地域である。市の中央を南北に縱断し印旛沼に流入する新川と、新川に中央部において流入する支流である東西に流れる桑納川とによって、大きく3つの台地に区分される地形である。またこれら台地も複雑に入り込んだ樹枝状の谷津によって、開析されている。水系はいずれも印旛沼に流入するものであり、東京湾へ注ぐものではない。

また、台地の規模も様々であり、小規模な舌状台地もなく、一見広い面積を有する台地を主として形成（註2）されている。これら台地の特徴は谷津に南面する側が急傾斜となり、北に向けて緩斜面となって谷津に下っていくこと（註3）である。

地質的にはロームの堆積が薄く、標高20mを越える台地上において2～3m程度であり、地区によっては20m未満の台地について立川ローム層の粘土化（註4）がみとめられる。

なお八千代市における自然環境については、地理学においては佐々木茂氏他、植生については山周寛人氏等によって調査・報告（註5）がなされているので、参照されたい。

2. 遺跡立地

遺跡の立地については気候の関係（例えば風向き）等、谷津に南面する台地上と従来一般的に言われてきたが、八千代市の地理的環境において谷に対して南側が急傾斜を帯びる場合にあっては、時代に係わらず遺跡の占地がなされていることが指摘できよう（註1文献参照）。

次に大きな河川について遺跡例をあげ、概要を示したい。

a. 神崎川流域

神崎川は八千代市の北の市境を流れ、対岸は印西町である。谷に北面してやや傾斜は強くなるが、この地域の台地が望む眺む新川に対しては、傾斜度は緩い。代表的な遺跡として佐山貝塚（分布地図 No. 12）があるが、南と北にそれぞれ谷が入り込んでおり、北側緩斜面に展開する遺跡である。おおよそ南側は12/25、北側は12/100の勾配である。このことについては現在調査中の北部遺跡群の各遺跡についても指摘可能である。

この地区は国道16号線島田台の交差点より新川と神崎川とに突き出した形の台地であるが、遺跡密度の濃い地区の一つであり、かえって遺跡把握の難しいところである。

b. 新川流域

市の中心河川であるため幾つもの小河川を有し、かつ新川に望む遺跡も各時代とも多い。この流域に古墳（8遺跡）が多い。南北を流れるため、両岸とも大きな比高差は認められないが、幾分西岸が小さい。しかし北部の保品地区と南部の高津地区をみると、地理的環境の限定性が示されている。高津新山遺跡（分布地図 No.239）においては22mの南側を背に、北へおよそ350mで8mの緩斜面に集落遺跡が展開する。

なおこの流域南部には、村上遺跡群・萱田遺跡群等調査例が増加している地区である。

c. 桑納川流域

上流は船橋市に遡り、この水系には海老ヶ作貝塚等知られている。この川によって疊地区が2つに別れるが、北岸には桑納新田遺跡・桑納古墳（分布地図 No. 59・58）等の遺跡が所在した。いずれも台地縁辺に所在し、比高差13~15mを測る。一方南岸の吉橋地区では一部低台地の形成がみられ、谷津が南西に奥深く侵入している等、対象的である。

d. 井野川流域

手綱川の支流で佐倉市との市境を南下する。この流域は西に侵入してきており、小さな谷津を形成している。阿蘇中学校東側遺跡（谷を東に眺む・分布地図 No.119）をみると、比高差は15mを測るが、北側緩斜面の傾向はここでも指摘される。

註1 八千代市教育委員会「八千代の遺跡」1983年、この報告時においては264遺跡であったがその後確認されたもの、分離した遺跡を含む。

註2 高津新山遺跡において概報で指摘しているが、現地表面においては単に緩斜面乃至平坦面が調査によって、浅い谷津が入り込んでいたことが確認されている。

八千代市教育委員会「千葉県八千代市高津新山遺跡」1982年

註3 佐々木茂他「八千代市の地形・地質図 八千代市文化財総合調査報告Ⅰ」八千代市教育委員会1981年

註4 高津新山遺跡の調査において確認されたもので、立川ローム層のハードにはいって間もなく（丹沢バシスの下あたりか）ロームが粘土化するものである。現在整理中。

註5 八千代市文化財総合調査団によって、1980年より分野別に実施されている。

山岡寛人「生物の調査報告—八千代市の屋敷林—八千代市文化財総合調査報告Ⅱ」1982年

＊ 「八千代市の社そう林—八千代市文化財総合調査報告Ⅲ」1983年八千代市教育委員会
佐々木茂氏等については、註3参照。

3. 本書掲載の遺跡群の位置と立地 (第1図)

各遺跡の所在する位置と立地について述べてゆくことにする。

村上宮内遺跡（分布地図 No.191）は村上字宮内 449 外に所在する。新川東岸の舌状台地の先端部分に立地している。縄文時代中期と奈良・平安時代の遺跡として周知の遺跡となっている。同台地上には七百余所神社古墳（円墳 1 基・分布地図 No.190）が所在している。

吉橋城址（分布地図 No.132）は吉橋字尾崎 739 外に所在する。桑納川の谷を北に望み、南にも谷が入り込む細長い舌状台地の先端部分に立地している。中世の城址であり、谷を隔てた南側の台地上には同じく中世の尾崎館址（分布地図 No.140）が所在している。

下高野作畠遺跡（分布地図 No. 91）と下高野作畠塚群（分布地図 No. 90）は下高野字作畠 209 外に所在する。北東方向へ延びる谷の西側の台地上縁辺部に立地している。塚群は 5 基からなっている。縄文時代中期と平安時代の遺跡として周知の遺跡となっている。

大山遺跡（分布地図 No.103）は米本字大山 447 外に所在する。米本団地の造成工事により旧地形はわからなくなっているが、新川から南へ入り込む谷の東側の台地上縁辺部に立地している。先土器時代・縄文時代前・中・後期・弥生時代後期の遺跡として周知の遺跡となっている。

村上新山塚群（分布地図 No.194）は村上字新山 668 外に所在する。新川下流域から南西方向へ入り込む谷の最奥端部の南側の台地上に散在する塚群である。塚 4 基からなっている。同台地上には縄文時代中期と平安時代の遺跡である村上新山遺跡（分布地図 No.193）が所在している。

桑納遺跡（分布地図 No. 57）は桑納字東割 278 外に所在する。桑納川北岸の舌状台地上に立地している。昭和59年に遺跡の一部が本調査され、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてと平安時代の集落址であることが確認できている。また、同台地上には人物埴輪を出土した桑納古墳群（帆立貝型 1 基・円墳 1 基・分布地図 No. 58）が所在したが、すでに調査され消滅している。

青柳台遺跡（分布地図 No.111）は米本字青柳台 1473 外に所在する。新川東岸の台地上に立地している。舌状台地の先端部であったかは米本団地造成工事の地形変化により不明である。縄文時代中・後期と奈良・平安時代の遺跡として周知の遺跡となっている。

佐山台古墳（分布地図 No. 20 の佐山台塚から改名する。前方後円墳 1 基）は島田台字佐山台 969 外に所在する。神崎川南岸の台地上に立地する。佐山台塚（分布地図 No. 21）が同台地上に所在している。田原窪古墳（分布地図内 A）は新発見の円墳で島田台字佐山台に所在する。佐山台古墳の所在する台地から小支谷を 1 つ隔てた東側の台地斜面部に立地している。

下高野新山古墳（分布地図内 B）も新発見の円墳で下高野字新山に所在する。下高野作畠遺跡と同台地上に立地するが台地縁辺部ではない。同台地上には縄文時代早期が主体となる下高野新山遺跡（分布地図 No. 92）が所在する。その一部は昭和61年に本調査されている。

第Ⅱ章 遺跡調査の概要

1. 村上宮内遺跡（第2図・図版1）

1. 発掘調査の経過

昭和60年9月（仮称）八千代市がき大将の森（キャンプ場）建設に先行して市教育委員会社会教育課社会教育係より照会文の提出があった。市教育委員会社会教育課文化係ではこれを受けて照会地に周知の遺跡（村上宮内遺跡・分布地図No.191）が所在することを確認し、県教育委員会へその旨を副申した。県教育委員会からの回答の結果、遺跡が所在するためその取扱いについて、県教育委員会・市教育委員会社会教育課社会教育係及び文化係による三者協議が行われた。現地形を全く変更しないという点、主要施設を谷部に配する点等から谷部のみの記録保存という形で協議が成立し、発掘調査の準備が進められた。

発掘調査は昭和60年12月16日から昭和61年1月8日に亘って実施された。12月16日から18日まで、環境整備・現場設営・グリッド設定作業、12月19日から25日まで遺構確認のため掘り下げ作業、昭和61年1月7・8日にセクション図作製作業の諸段階を経て調査は終了した。

2. 遺跡の立地

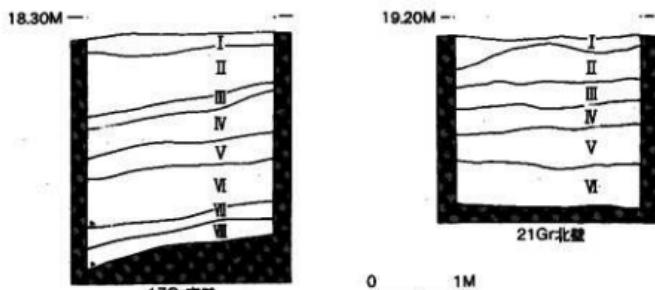
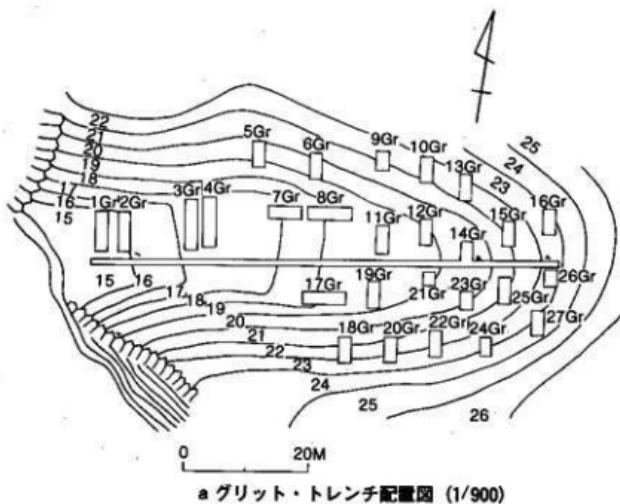
本遺跡は、北流する新川を見下す右岸台地上に位置する。南向きの台地下には東方向に樹枝上に谷が入る。周知の遺跡である村上宮内遺跡について概略を述べる。台地は標高20～25mを測る。今回実施した調査部分は、その浅い谷部で標高15～20mである。分布調査時には、加曾利E式期の繩文土器片・土師器片・須恵器片が出土しており、包含地となっている。

3. 発掘調査の概要

グリッドの掘り下げは、谷頭部にあたる最東部の斜面から行った。層序の中ではふれなかつたが、斜面部における層位は、表土層・ローム漸移層・ソフトローム層となっている。斜面部分におけるグリッドを掘り下げ確認を行った後ち、谷部に設定したグリッド・トレンチへと移行した。斜面部分において遺構は確認できなかったが、土師器・須恵器の小破片が第2層のローム漸移層から少量出土した。谷部の確認においては、17Gr第2層中より須恵器變形土器洞部片や、3Gr第3層中よりまとまった形で加曾利B式期と考えられる粗製深鉢等が出土した。10Grにおいては、ローム漸移層下に淡橙褐色を呈した粘土層が確認された。その一部を掘り下げてみると、茶褐色砂質層が堆積しており、常総粘土層とその下層にあたる成田層と判断するに至った。

4. 発掘調査の方法

調査は、スペースキャビンと呼ばれる小型宿泊施設設置箇所に2×4mのグリッドを、諸施設



b 土層断面図 (1/60)
第2図 村上宮内遺跡実測図

の設置箇所に幅2m・長さ適宜のトレンチを、また、発掘区中央に1×80mのトレンチを設定し、遺構確認を行った。

5. 遺跡の層序

本遺跡における土層層位は第2回に掲げるよう、第1層・表土層・暗褐色を呈し、ぼそぼそしている。第2層・暗褐色土層・ローム粒を含む。粘性はなく粒子が細かい。第3層・黒褐色土層・ローム粒を斑点状に含む。粘性がありしまっている。第4層・茶褐色土層・ローム粒主体として暗褐色土を少量含んでいる。第5層以下第8層に至る層は、砂層であり常緑層にあたると思われる。第8層の下層において軟質ローム層の堆積が見られる。遺物を包含する層は、第2層下部及び第3層中にあたる。また、第1トレンチ最奥部の斜面部分においては、第3層の堆積が見られない。

6. 遺構・遺物

本遺跡において遺構は確認されなかったが、流れ込みと考えられる遺物が何点か出土している。以下、各グリッド・トレンチ毎に出土遺物を紹介する。1Gr第3層下層からは、加曾利B式期と考えられる粗製深鉢底部が出土している。4Grからは、須恵器變形土器胴部片が第3層上面より出土している。外面は平行叩き目文、内面の押えには同心円文の道具を使用している。本遺跡出土の加曾利B式期と考えられる土器片は、全て粗製深鉢とされる紐線文系土器である。3Gr第3層中からは、加曾利B式期の遺物の他に堀之内式期の土器小片や、浮島I式期と考えられる波状貝殻文を施したものが出土している。第1トレンチ30~40m地点第3層中からは、尖底の先端部分を削り、平底とした深鉢底部から胴部が出土している。底部には綱代痕を有し、胸部遺存部から下端にかけて縱方向のヘラ削りを施す。砂粒を多く含みざらざらしている。また、歴史時代の遺物としては、16Grローム漸移層よりロクロ使用の土師器環形土器や、17Gr第2層中からロクロ使用土師器環形土器底部や同じく体部が出土している。底部は回転糸切り・体部下端無調整で、内面に水挽き痕を明瞭に残す。後者の体部は、内面黒色処理後、横位ヘラ磨きを施す。

7. 小 結

今回は、主体となる台地の斜面部・谷頭部・谷津部分について調査を実施した。台地上からの流れ込みと考えられる遺物からは、分布調査時の遺物を含め縄文時代前・中・後期の台地上における遺構展開が考えられるであろうし、更に歴史時代についても、9世紀代と考えられる遺物が出土している。また、対象面積の16%弱にあたる319m²を確認したにもかかわらず濃厚な土器・貝等の捨て場は確認されなかった。また、調査区は東方向の谷津のため、その北にあたる斜面部に野銀治等の施設があるのではないかと予測したが今回確認できなかった。ただその片鱗として一塊の銛鉄乃至鍛鉄が3Gr第3層中から出土している。

2. 吉橋城址(第3、4図・図版2、3、4)

1. 調査の経過

昭和61年7月吉橋ゲートボールクラブ(代表 福田 堡)より当該地について、ゲートボール場造成工事にともなう埋蔵文化財の有無の照会が提出された。市教育委員会では以前より、当該地について、中世の城館址であることをつかんでおり(註1)、八千代市にとっては数少ない保存状況のよい、中世の遺跡であることから、極力現状保存の方法を検討していた。一方県教育委員会にその旨副申していた。県教育委員会、事業者代表、市教育委員会との三者で協議を持ち、保存措置の可能性を探るため、該地における地上造構の有無、造構確認面までの深さなどの資料を集めることを目的とした、事前の確認調査を実施し、ゲートボール場造成には盛土による保存を最善の方法で行うことと決定した。

盛土による造成区域は極力土壘等の造構にからないように選定し、実施された。

確認調査は昭和61年11月15日より開始され、同月22日には予定の調査を終了した。

2. 遺跡の立地

調査区域は八千代市吉橋字尾崎739番地に所在する。

本遺跡は、八千代市内中央を東に流れる桑納川の南岸に位置している。桑納川南岸の寺台、吉橋、麦丸周辺の小支谷は、台地を南西方向に樹枝状に侵食し、北東方向に延びる細長い舌状台地を形成している。

吉橋城はこの舌状台地の北東の先端に、自然地形を利用して築かれている。

標高 22.00m。

3. 調査の概要

調査対象面積 1,400m²、確認調査実施面積 216m²。

造構は随所に検出されており、溝状造構10条、ピット状造構42基を数える。不明のもの3ヶ所。しかし、それぞれの造構間の関連が明確ではなく、詳細には不明である。造構の規模等については、部分的な確認のみであり、幅が1m程の溝状造構が2条検出され、ピット状造構については1mから數十cm程度のものである。

4. 調査の方法

極力土壘等の地上構造物のない、平坦な場所に調査区域を設定したものの、微細な地形の変化は失われてしまうため、確認調査に先立ち、調査区域内の地形測量を実施した。この地形測量は今回の調査に先行して実施した吉橋城の全体の地形測量との関連を持たせるため、基準点を同一にして行った。また、調査区域内の等高線の幅は25cmとし、より詳細な地形測量を必がけている。

調査区域は不整四角形であるため、調査区域境界西側隅の杭を基点とし、そこから南側隅の杭

を結ぶ線を基線として設定した。グリッドは5m方眼を用い、基線方向にアラビア数字、それに直交する方向にアルファベットを付し、グリッド名称とした。

掘削に用いたトレンチは1グリッドおきに2m×4mで設定し、全体の概要を捕らえるようにつとめた。さらに、随時同規模のトレンチをトレンチ間に設定し調査した。

5. 遺跡の層序

調査区域は台地の上にあり、ほぼ、以下の基本土層よりなっている。

I層 表土層 暗褐色土 根などによる腐食土層、土のしまりなし

II層 褐色土層 土のしまりはよい

III層 暗褐色土層 土のしまりはよい 検出された遺構はこの土層中位、ないしは上面より掘り込まれている。

IV層 ローム漸移層

V層 ソフトローム層

調査区域には、微細な地形の凹凸が観察され、これらは黒褐色土及び暗褐色土などを主体とし、ローム粒子を混入する、人為的と判断される土層より構成されている。また、遺物の出土状況はII、III層中のものが多いことが確認されている。

6. 遺物

特に、今回の確認調査では、遺構の調査は実施されておらず、それぞれの遺構についてその性格については不明である。遺物は陶磁器類が大半である。寛永通宝が2枚出土する。しかしながら、この調査の整理作業については、現在徐々に行っており、整理作業が終了次第詳細を報告する予定である。

7. 小結

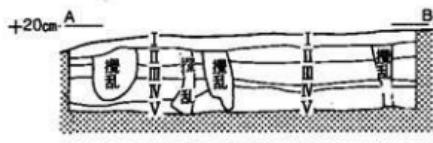
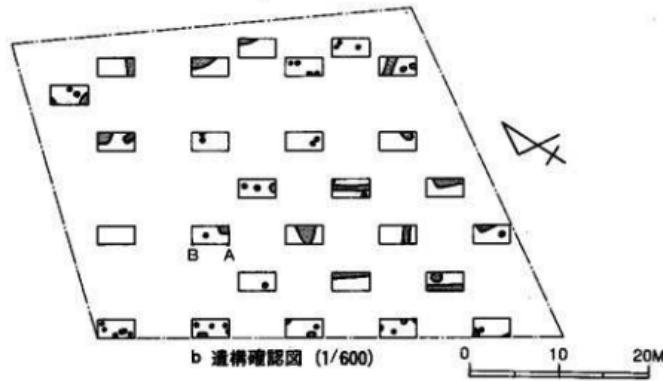
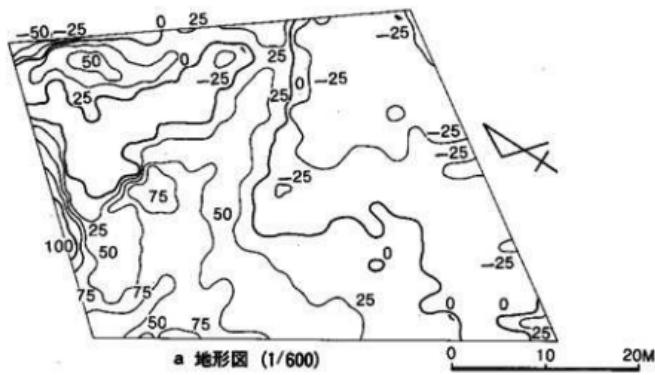
吉橋城は北東方向に延びた舌状台地の先端に自然地形を利用して構築された城館址である。貞福寺の境内と、その北側の区域との二つの「郭」によって、直接の城は構成されている。その範囲は約20,000m²と推定される。

蓄講は南北共にほぼ同じ標高を測り、その間を深い薬研堀により区画されている。この薬研堀は現在は堀底道として利用されており、近年行われた改修工事のため大きく現状の変化を余儀なくされている。堀の深さは5.5m、幅10m以上と大きなものであることが推測される。

北側の郭は東側に薬研堀を掘り、内側と外側に土壘を構築する。土壘の現存高は内側の最大高で3.5m、外側の最大高で3mを計る。その東側は大半を土取りにより破壊されているが、部分的に観察される地形から、比較的急な傾斜が続くものと考えられる。西側は自然地形を利用し、台地の縁辺に土壘を築いている。北側は測量からも明確な土壘は確認されていないが、わずかな地形の変化から土壘らしきものは推定される。この郭の内部は平坦ではなく、測量図にもあらわ



第3図 吉橋城址地形図 (1/1500)



c 土層断面図 (1/60)

第4図 吉橋城址実測図

れでいるところより微細な起伏が見られる。これらがどのような構造物であるか明らかではないが、地元の人によれば太平洋戦争中に軍隊が防空壕を掘ったということであり、吉橋城当時のものであるという断定はできない。

南側の郭は貞福寺の境内が中心であったものと推定される。この郭の東側の土壘は以前の調査によれば（註2）ほぼ良好な保存状況であったが、境内の拡張により土壘の南側は破壊されてしまっている。西側の土壘についても部分的には遺存しているものの、多くはすでに存在していない。

調査区域は北側の郭の比較的平坦な部分の東よりに位置している。溝状遺構10条、ピット状遺構42基が検出されている。しかし、どれも部分的であり、遺構を総体的に把握するには今後の調査によらなければならないであろう。

（註1）「八千代市中世館城址調査報告」 1976 八千代市中世館城址調査団

八千代市教育委員会

（註2）「八千代市の歴史」 1978 八千代市市史編纂委員会

3. 村上新山塚群（第5、6図・図版5、6）

1. 調査の経過

昭和58年7月少年野球連盟村上ファイターズ（代表 宮崎浩三郎）より、当該地について少年健全育成のため少年野球の練習グランドの造成工事をしたい旨、埋蔵文化財の有無の照会が提出された。市教育委員会では県教育委員会にその旨副申するとともに、該地について事業者の協力のもと試掘調査を実施した。その結果、区域内には塚1基が確認され、その他の遺構については確認することができなかった。確認された塚は以前から確認されていたものであり（註1）、村上新山塚群の内の1基であることが判明した。県及び市教育委員会、事業者の3者で協議を持ち、塚の現状保存について検討されたが、事業の変更はむづかしく、やむなく記録保存を行うこととなった。

調査は塚の形状を捉えるために、昭和58年12月5日より、塚の測量調査を実施した。塚の調査は同年12月19日より昭和59年1月17日まで行われた。

整理作業については、その後十分な時間を持ちえなかつたため、完了には至っていない。

2. 遺跡の立地

調査区域は八千代市村上字新山664番地に所在する。

市内を南北に貫流する新川は八千代市北端で神崎川と合流し向きを変えて市の北端に沿って東西に流れ、印旛沼に注ぎ込む。これに、市の東側の境界に沿うように支谷が北上し佐倉市松崎で合流する。この支谷は四方に小さな谷津を広げており、その西側の台地上に位置する。上高野白幡より西に1,500mほど入り込んだ地点である。また、新川から東に1,000mの地点である。

標高 26,000m。

3. 調査の概要

これらの塚群については明確な地図もなく、総数7基と当初報告されていたが（註1）、本調査区域内の1基、調査区域より北側に現状保存されている、小規模なもの1基、調査区域より南側に、半壊したもの1基、計3基が確認されたのみで、その他については所在不明である。

現在確認されている3基のなかでも今回調査対象になった塚は、中央に位置している。一辺20m程の規模をもち、比較的保存状況の良いものであった。また、現状保存されている北側の塚は直径8m程のものである。さらに、南側に位置している塚は、塚の東側の半分がすでに削平されており、保存状況は極めて悪いものと考えられる。直径20m程と推定される。また、この塚の東側の地点にも、小さな塚の存在が報告されている（註2）。しかしながら、塚の半分を削平したのと同時にこの塚も一緒に削平されてしまったものと思われる。

今回の調査にあたり、実施された測量調査の結果、塚の形状は塚の底面形で隅に丸みを持つ四角形と考えられ、上半部では土砂が流出しやや円形を呈する。底面の規模は一辺が20m、高さ2.7mを測る。塚の周囲に対して行われたトレンチ調査では、調査区域の東側に幅1m程の溝状遺構が南北に走っていた。この溝状遺構については特に資料を得られなかったが、塚との関連は薄いものと考えている。

4. 調査の方法

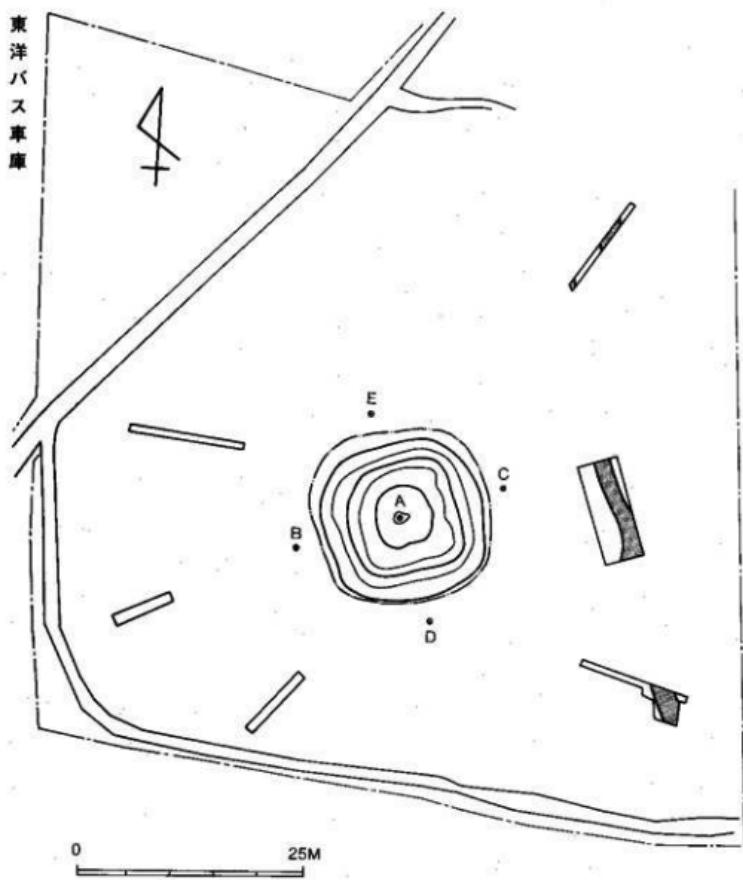
塚の発掘調査に先行して、塚の形状を正確に把握するために、地形測量を実施した。塚の頂点に打たれた基準杭より一定の高さを持たせたポイントをレベルにより設置し、各ポイントを平板測量した。等高線の間隔を25cmとした。発掘調査は塚の頂点から、測量をした成果に基づき、任意ではあるが、ほぼ方形を呈する塚の底面に対して各辺に直交するラインを設けた。そのラインに合わせて1m幅のトレンチを十字に設定することとした。これらのトレンチは塚の構築状態を観察するためにもちいた。塚の周囲に対しては、任意にトレンチを6箇所設定し、塚の周囲に及ぶ遺構の存在を確認するために発掘を行った。

5. 遺跡の層序

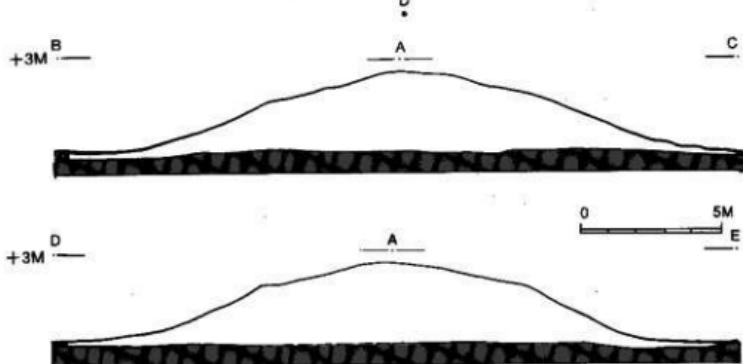
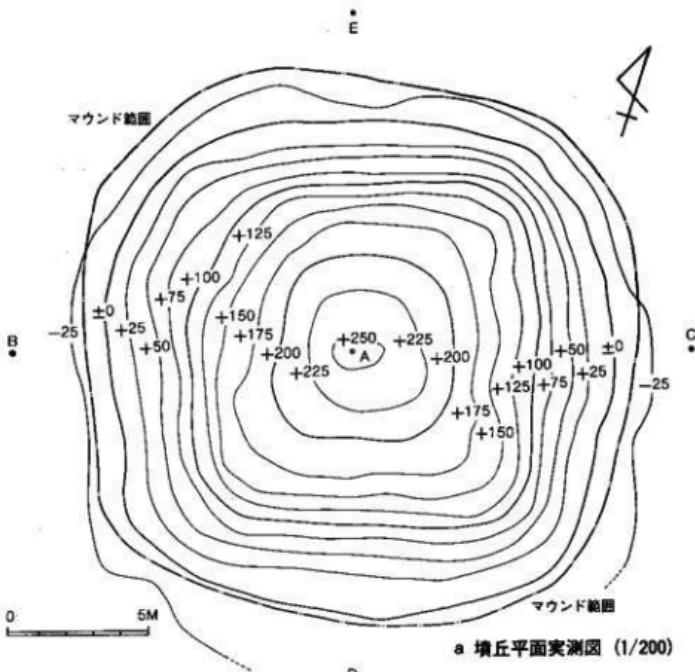
平坦部分での土層観察は、十分には行われていないが、基本的に以下の2層よりなっている。

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 ソフトローム層



第5図 村上新山塚全測図 (1/625)



第6図 村上新山塚実測図

観察した土層が塚の周間に限られており、一般的な土層の堆積については明らかではないが、観察された部分では、塚の構築に際して、周囲の土をソフトローム層中まで削って築き上げていることが分かる。

塚内部の土層の堆積は、褐色土、暗褐色土、黒褐色土、明褐色土などの土層がほぼ水平に堆積するのが一般的のようである。部分的には不自然に複雑な堆積をするところも見られる。ところどころに、築き固められた堅くしまった土層も観察される。全体では120層以上に分層される。また、ローム粒子の混入が量の差はあるが全体的に混入が見られる。

東側に検出された溝状遺構の堆積は黒褐色土を主体として、焼土粒子が僅かに混入される。全体的にしまりの良い土層である。自然堆積と考えられる。

6. 遺 物

各トレンチから出土した遺物は、弥生式土器、土師器など僅かである。中でも縄文を施文した弥生時代の土器の胴部片が多く占める。また、板碎片とも考えられる綠泥片岩も塚の表土層中から出土している。

7. 小 結

当初報告されている村上新山塚群は7基であったが、今回の調査に於いて確認されたものは3基のみであった。特に今回の調査は現存する塚の内でも規模も大きく、保存状況も良好であった。塚の形状は、塚の下部が方形状を呈し、上部ではやや円形状である。これは、上部が崩壊した可能性が十分ある。

塚の構築方法は、塚の周囲のソフトロームが削り取られていることから、周囲の土砂をかき集めて盛られていることがわかる。また、これらの盛土は人為的につき固められている。

わずかな調査期間と費用で行わざるを得なかつたため、十分な成果を得られなかつた。しかし、今後この調査の成果を十分に活用し、より多くの資料を得られるよう整理作業を注意して行っていかねばならないだろう。

(註1) 「八千代の遺跡」 1983 八千代市教育委員会

(註2) 「村上新山遺跡発掘報告書」 1978 村上新山遺跡発掘調査団

この時の報告では4基となっている。

4. 大山遺跡 (第7図・図版6、7)

1. 発掘調査の経過

昭和57年8月、駐車場造成工事に先行して島田亘氏より照会文の提出があった。同年9月に島田氏より野球場へ目的を変更するという書類が提出された。これを受けた市教育委員会は、照会地に周知の遺跡として大山遺跡(分布地図No.103)が所在することを県教育委員会へ副申した。昭和59年5月、県教育委員会より遺跡が所在するという回答を受けて三者協議へと移行した。その結果、工事については一切掘削等は行わず、盛土し転圧するということに決まり、埋蔵文化財の調査は確認調査のみを行うこととなりその準備が進められた。

2. 遺跡の立地

米本団地の造成工事により周辺の地形は旧地形とまったく異なっているが、新川より南へ進入してくる谷の東岸台地上に大山遺跡は立地している。標高19mから20mの台地上に遺跡は広がっている。今回の調査範囲は遺跡の全域ではなく、台地縁辺部分だけである。

3. 調査の概要

大山遺跡は先土器時代、縄文時代前・後期、弥生時代後期の遺跡としてすでに把握されていたため、遺跡は台地上を中心に展開する集落址を想定することができた。台地上平坦部を中心に調査を進めてゆくことにし、昭和59年11月初めに調査計画を立て準備にとりかかった。調査方法は次の節にて述べるので、ここでは調査の経過について述べてゆくことにする。11月8~9日にかけて環境整備及び方眼測量を実施した。11月12日から29日かけて確認調査を実施した。グリッド等の掘り下げ作業は12~29日、セクションの実測作業は19~22日、遺構確認図の実測作業は22~27日、遺構及びセクションの写真撮影は27~29日、高射砲陣地と思われる土壘の実測作業は27~29日にかけて実施した。現場撤収作業は29日の午後実施した。確認調査は9日間にて終了した。

4. 調査の方法

調査は住居址等の遺構確認に主体を置いたため、グリッド・トレント法を採用することとした。方眼測量(調査区域に合わせて設定したため公共座標には合わない。)は10m方眼とし、グリッドは10m四方に2×4mを2つ設定し、結果的には市松模様となった。セクション実測ラインは、東西・南北方向に各1本ずつとした。遺構確認図はメッシュを用いて実測した。また、高射砲陣地と思われる土壘に対しては、平板による測量調査と断面露出部分におけるセクション実測調査を行なうこととした。

5. 遺跡の層序

大山遺跡の層序は基本的には5層に分層することができる。各々について説明を加える。

第Ⅰ層・茶褐色土層・表土層であり草木の根が多くやわらかい層である。第Ⅱ層・黒褐色土層

・黒色土が主体を占め暗褐色土を少し含む層でしまりは弱くも強くもない。第Ⅲ層・暗黃褐色土層・ソフトロームの漸移層である。(第Ⅲa層は同じくソフトローム漸移層であるがローム量がさらに増えるため分層する。)第Ⅳ層・暗黃褐色土層・ソフトローム層である。所々にロームブロックを含む。第Ⅴ層・暗黃褐色土層・ハードローム層である。

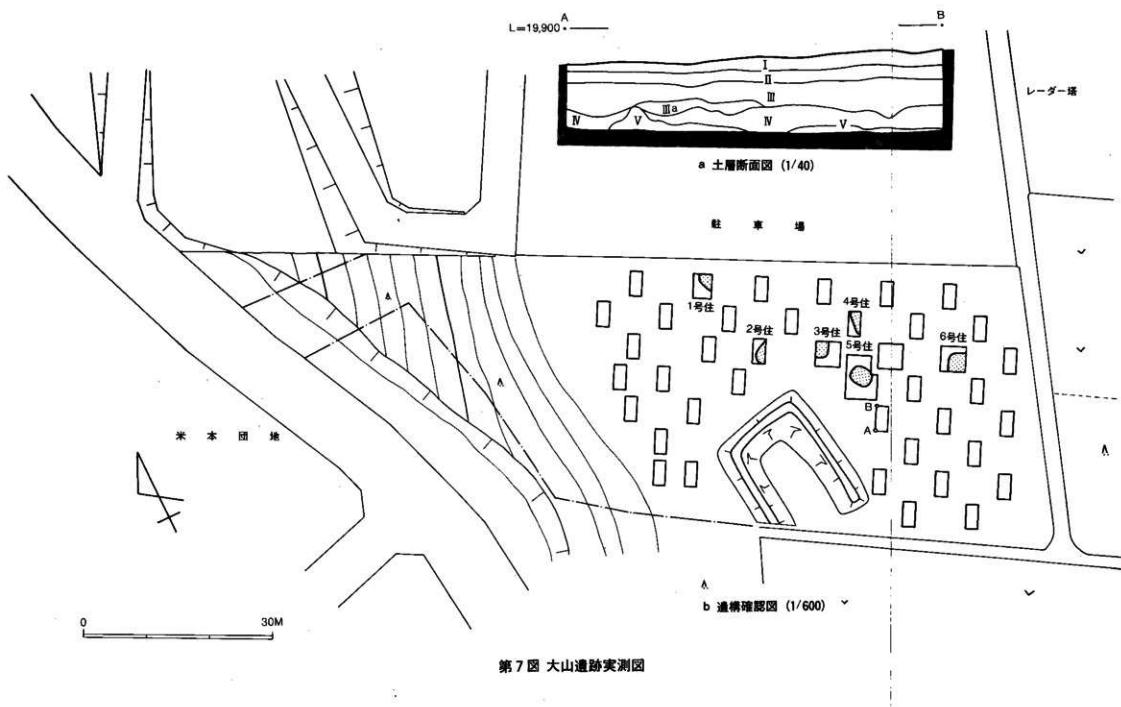
6. 遺構・遺物

調査の結果、堅穴式住居址6軒を検出した。以下各々について説明を加える。

第1号住居址は調査区北端部に位置する。覆土は黒褐色土であり、ボーリングにて約0.4mを測る。遺物は、土師器と弥生後期の土器小破片を極少量出土したが、主体は縄文土器の小破片で早・前期のものが20点くらい出土した。プランははっきりしないが、隅丸方形か隋円形を推定することができる。第2号住居址は一辺約4mの隅丸方形の住居址を推定することができる。覆土は黒褐色土であり、ボーリングにて約0.3mを測る。遺物は、土師器と弥生後期の土器小破片を少量出土したが、主体は縄文土器の小破片で早・前期のものが20点くらい出土している。本住居址は地表面より大穴が開いており一部破壊されていると思われる。第3号住居址は一辺約4~5mの隅丸方形の住居址を推定することができる。覆土は黒褐色土であり、ボーリングにて約0.3mを測る。遺物は、弥生後期の土器小破片を10点くらい出土するが、主体は縄文土器の小破片で早・前・中期のものが30~40点くらい出土している。第4号住居址は一辺約4mの隅丸方形の住居址を推定することができる。覆土は暗褐色土であるが幾分黒色度が強い色調となっている。ボーリングにて約0.3mを測る。遺物は、土師器と弥生土器の小破片を極少量出土したが、主体は縄文土器の小破片であり20~30点くらい出土している。前期のものが多いようである。第5号住居址は一辺約3.5mの隅丸方形もしくは隋円形の住居址である。覆土は暗褐色土で幾分黒色度が強くなっている。ボーリングにて約0.2mを測る。遺物は、土師器の小破片は極少量であるが、縄文土器の小破片は50~60点くらい出土し、弥生土器の小破片も30点くらい出土している。縄文土器は前期のものが多い。第6号住居址は一辺約4mの隅丸方形の住居址を推定することができる。覆土は暗褐色土で幾分黒色度が強くなっている。ボーリングにて約0.4mを測る。遺物は、弥生土器の小破片を極少量出土したが、主体は縄文土器の小破片であり20~30点くらい出土している。前期のものが多いようである。

7. 小 結

今回調査したのは大山遺跡の一部分にしかすぎないが、縄文時代の前期が主体となる遺跡ではないかと考えられる。遺跡の種類は集落址であり、台地縁辺部より平坦部に遺跡の中心が広がっているのではなかろうか。その奥行は不明である。また、この集落址は調査区の北側へ展開している可能性が高い。また、調査区内には戦時中に構築された高射砲陣地もしくは戦車待避壕と思われる土塁があった。



第7図 大山遺跡実測図

5. 下高野作畠遺跡 (第8図・図版8)

1. 発掘調査の経過

昭和60年11月、ゲートボール場造成に先行して代表者・立石吉より照会文の提出があった。市教育委員会では、照会地が作畠塚群、作畠遺跡として周知の遺跡である点を考慮し県教育委員会に副申した。県教育委員会ではこれを受けて遺跡が所在する旨を市教育委員会に回答するとともに三者協議へと移行した。その結果、照会地全域に盛り土をして地中の遺構に影響を及ぼさないことを前提に確認調査を実施することとなった。

発掘調査は、昭和61年3月5～17日にかけて実施された。5日トレンチ設定作業、6～10日第2・第3トレンチ掘り下げ作業、11～15日第1トレンチ掘り下げ作業、17日平面図他実測作業の諸段階を経て調査を終了した。

2. 遺跡の立地

本遺跡は東流する新川を支える南西方向の小支谷の最奥部を見下ろす台地上に位置する。標高は24～26mである。照会地を含む一帯は、5基からなる作畠塚群（分布地図No.90）、縄文中期・平安時代の土器片を出土する作畠遺跡（分布地図No.91）が所在する。

3. 発掘調査の概要

トレンチ掘り下げは、第3トレンチより開始したが、この一部分は以前に公園として利用され遊具が設置されていたということで砂利等が敷きつめられていた。これを取り除くと2号住居址が確認できた。また、2号住居址とは異なる覆土をもつ落ち込みが確認でき、更に略北方向にカマドを有する3号住居址を確認した。続いて第2トレンチ調査に移行し、3号住居址とは明らかに主軸方向が異なる1号住居址を確認した。また、第3トレンチにおいて確認した性格不明の落ち込みとつながるような位置に同様な落ち込みを確認し、溝状遺構として性格を考えるに至った。第1トレンチにおいても漸次掘り進めると、第2トレンチ・第3トレンチにおいて確認した溝状遺構と考える落ち込みと対応する位置に落ち込みを発見し、第1号溝状遺構とした。

4. 発掘調査の方法

調査は、幅2m・長さ16.5～21.5mのトレンチを3本設定し掘り下げを行った。トレンチ間の間隔は4mとした。トレンチの方向は、調査区東西方向と平行に設定した。

5. 遺跡の層序

本遺跡における層位は第8図に掲げるよう、第1層・表土層・暗褐色、下層において黒褐色を呈し、ぼそぼそしている。第2層・ローム漸移層・茶褐色を呈し、ローム粒・暗褐色土を含む。粘性がありしまっている。第3層・ソフトローム層、の3層からなる。遺物包含層は第2層中で縄文早期条痕文系の遺物が出土した。

6. 造構・遺物

平安時代の竪穴式住居址 3軒、時期不明の溝状造構 1条について説明を加える。

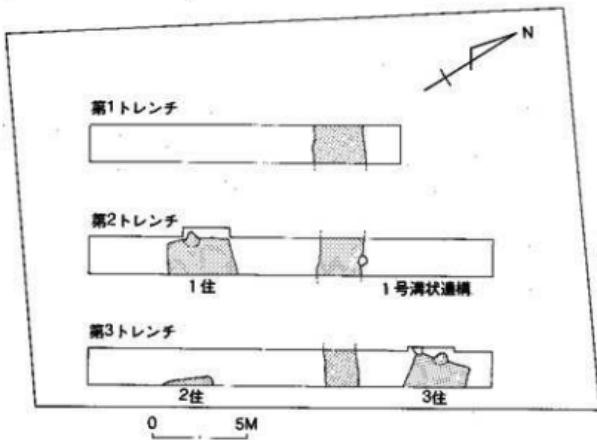
1号住居址は、大凡 N-60°-W の主軸方向である。規模は 3.2 × 2.0 m 以上で、北西方向のカマドは若干偏った位置に造られている。覆土は黒褐色土で 1 ~ 5 mm 大のロームブロックを含む。また、確認面におけるカマドの状況は、茶褐色砂質土 + 白色粘土が集中して見られた。炭化物が覆土全体に広がっていることから焼失家屋の可能性もある。2号住居址は、北カマドと想定すると大凡 N-22°-E の主軸方向である。規模は確認できた範囲で 2.6 × 0.6 m である。カマドは確認できなかったが、覆土に焼土粒が含まれていることもあり、北カマドの可能性が持たれる。覆土は暗褐色を呈し、ローム粒と黒色土粒がまんべんなく混ざりしまっている。3号住居址は、大凡 N-42°-W の主軸方向である。規模は 2.9 × 2.1 m 以上でカマドは若干偏った位置につくられている。覆土は暗褐色を呈し、ローム粒と黒色土粒がまんべんなく混ざっており、少量のロームブロックが含まれる。また、確認面におけるカマドの構築土であるが、暗褐色土 + 茶褐色砂質土である。1号溝状造構は、大凡 N-58°-E の偏りを持っている。覆土は暗褐色を呈しローム粒を含んでいる。黒色土はそれほど顕著ではない。

1号住居址～3号住居址、各トレンチ出土の遺物について説明を加える。

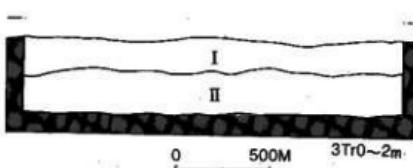
1号住居址からは、土師器では壺形土器、須恵器・くすべ焼成土器においては變形土器胴部破片が見られる。土師器壺形土器は、体部外面に墨書銘を持つものや内面黒色処理後ヘラ磨きを施すものである。變形胴部は、外面に平行叩き目を有する。2号住居址からは、確認面においてくすべ焼成土器變形土器胴部片が出土している。3号住居址からは、土師器では壺形土器と蓋形土器、須恵器・くすべ焼成土器においては變形土器や小破片ではあるが瓶乃至壺形の肩部がある。土師器壺形土器は、ロクロ使用の箱型を呈するものである。蓋形土器は、つまみ部分は欠落しているが、ロクロ使用で内面黒色処理を施し、内外面にヘラ磨き調整を施すものである。須恵器・くすべ焼成土器の變形土器は、外面平行叩き目文・内面同じ円文の整形痕を残す。トレンチ出土のものとして、第1トレンチ 15m 地点第2層下部より茅山式期の土器片が出土し、第2トレンチ 5m 地点第2層下部より野島式期・茅山式期の土器片が少量出土した。

7. 小 結

今回確認した住居址 3軒は、いずれも出土遺物から平安時代 9世紀前半から中葉の時期と考えられる。溝状造構については、遺物が出土していないのでわからないが、覆土の状況からはそう古い時代のものとは考えにくい。今回調査した部分は、台地縁辺部であり 3軒の住居址を確認したが道路を隔てた反対側にも展開する可能性は高い。今後の調査によって明らかにしたい。



a 造構確認図 (1/300)



b 土層断面図 (1/30)

第8図 下高野作烟遺跡実測図

6. 桑納遺跡（第2次・第9図）

1. 調査の経過

昭和60年2月、八千代市經濟部農政課より当該地について、運動広場として盛土による造成工事を実施するために、埋蔵文化財の有無についての照会が市教育委員会に提出された。市教育委員会では、その前年度に実施した桑納遺跡（註1）の隣接地でもあり、縄文時代前期の土器の散布が知られていた。盛土による保存が当初からの計画に明確であったため、県教育委員会及び市教育委員会、市農政課3者の協議がもたれ、確認調査を実施することで合意された。

当該地の現況が下草の生い茂った林であり、伐採作業から開始した。昭和60年2月19日から6日間にかけて、必要な部分に限定して行われた。発掘調査は昭和60年2月26日より、方眼測量を開始し、昭和60年3月30日までに発掘作業、実測を実施した。

2. 遺跡の立地

調査区域は八千代市桑納字寅高入775番地に所在する。

桑納遺跡は八千代市内のほぼ中央を、東に流れる桑納川の北岸に位置している。北岸は樹枝状に複雑な小支谷を形成しており、桑納川を望む大地の先端から500mほどの地点に調査区域が位置している。台地の先端の一部は昭和58年からの調査により、弥生時代から古墳時代前期を主体とする集落跡が検出されている。今回の調査区域はその奥に位置する。

標高 23.00m

3. 調査の概要

桑納遺跡第2次調査は昭和60年2月19日から昭和60年3月30日まで実施された、農免道路の第1次本調査（註1）により大地の先端部には、弥生時代から平安時代までの集落跡が高い密度で展開していることが報告されている。また、この調査に先行して実施された農免道路の確認調査では、今回の調査区域の南西の隣接区域も調査されており、縄文時代中・後期の遺物が検出されていた。その当時の調査では本調査には至らなかったが、周辺には縄文時代中・後期の遺跡の展開が予想されていた。

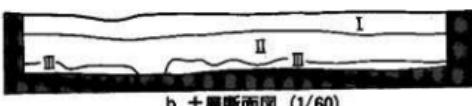
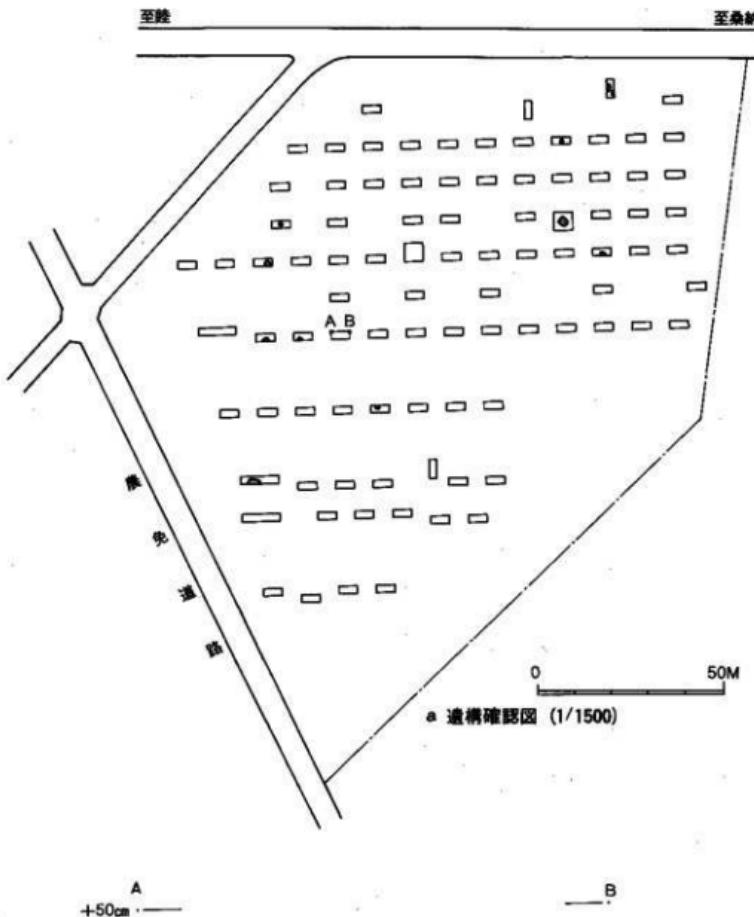
今回の確認調査では、直径1mから2m程のピット状遺構が9基検出された。それぞれの時期については明確な資料が検出されていない。しかし、調査区域から出土した遺物は比較的少なく、縄文時代前期、中期のものであった。特に縄文時代中期・加曾利E式が大半を占めている。

調査対象面積15,000m²、調査面積1,600m²。

4. 遺跡の層序

調査区域は台地の平坦部にあり、以下の3層の基本土層に分層される。

第Ⅰ層 表土層



第9図 桑納遺跡（Ⅱ次）実測図

第Ⅱ層 暗褐色土層

第Ⅲ層 ソフトローム層

検出されている9基のピット状遺構は、確認面での観察で、黒褐色土が主体をなす土層である。炭化材、炭化粒子などの混入も見られた。また一部のピットからは多量の焼土粒子が混入しているのを確認することができた。

5. 調査の方法

調査区域周辺には位置を確定できる基準杭が存在しないため、基本的には任意にグリッドの設定を行った。調査区域の北側を走る市道の幅杭を基点にして、任意の方向に10m 間隔で方眼測量を行った。1グリッドを10m 単位とし、南北方向にはアルファベットを、東西方向にはアラビア数字を付した。

発掘調査は2m×5mのトレンチを基本として実施した。基本として、10m四方のグリッドについて1箇所を掘削し、補足的にその間に同様のトレンチを入れ、または遺構の形状を確認するために、拡張を行った。

6. 遺 物

遺物の出土状況は、調査区域の北側に比較的多くの土器が出土しており、南側からの出土は遺構の周辺に限られており、極端に少なくなっている。

出土した遺物は縄文時代と弥生時代のものである、遺跡の中心は縄文時代の中期がその主体であると判断される。

縄文時代の中期のものとして、阿玉台式土器と加曾利E式土器が大半を占めている。

7. 小 結

今回の調査区域は桑納遺跡の北側の端に当たり、第1次本調査で明らかになった弥生時代から古墳時代前期を主体とする集落とは全く別の遺跡という感が強い。今回の調査に於いて明らかになった遺跡がどのように周囲と関連していくのかは明らかでない。

1m から 2m ほどの土塊が散在し、遺物量も特に多くはない、このような遺跡のありかたについて、今後多くの資料の蓄積を待ちたい。

(註1) 「桑納遺跡」 1985 八千代市教育委員会

7. 青柳台遺跡（第10図・図版9）

1. 調査の経過

青柳台遺跡の発掘調査は、昭和59年11月に株式会社 米本造園土木より、当該地について仮設住宅展示場造成の計画があり、埋蔵文化財についての有無の照会があった。市教育委員会では現地踏査を行い、現況では判断が困難である旨、県教育委員会に副申した。そのため、県教育委員会の指導のもとに、市教育委員会では事業者の協力をえて、開発予定区域について、試掘調査を実施した。その結果、県教育委員会より開発予定区域の18,200m²のうち、北端の6,000m²についてのみ、遺跡の範囲であるとの結論が出された。

その成果をもとに、県教育委員会、市教育委員会及び事業者との協議がもたれた。そして、遺跡の範囲のうち一部については現況のままで、開発予定区域から外し、残りの1,500m²については現況保存するための緑地とし、確認調査を実施することとなった。

発掘調査は昭和60年1月30日より同年2月4日まで行った。

2. 遺跡の立地

調査区域は八千代市米本字青柳台1455番地に所在する。

八千代市を南北に貫流する新川の東岸に位置する。現在の地形の形状は、昭和43年3月に工事の行われた国道16号線によって一部台地を削られ、昭和44年ごろ、米本団地の造成によって、大きく変化しており、本来の姿を想像するのも難しいほどである。米本団地の西端には米本神社あたりまで南北に蛇行して延びる谷津があり、国道16号線の西側をも含む大きな舌状台地を形成していた。青柳台遺跡もこの台地の中にある。国道16号線の西側の台地の先端部分にあたる。今回の発掘調査区域は国道16号線の脇の新川を臨む大地の先端に位置している。

標高 22.00m

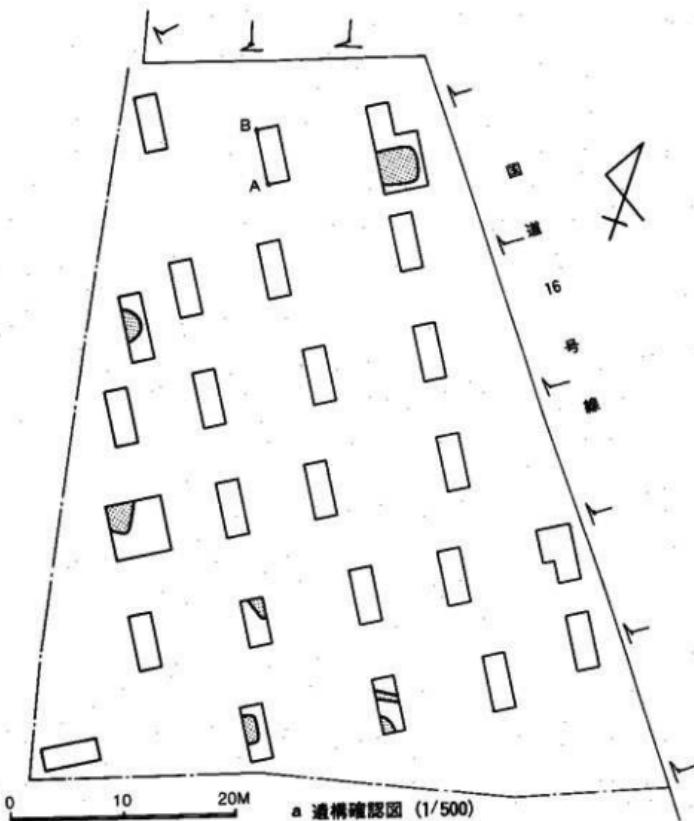
3. 調査の概要

この地区的発掘調査例は極めて少なく米本団地、及び国道16号線の造成工事の時点でも発掘調査は行われておらず、遺跡の有無すらも今はもう判らない。しかしながら、今回の調査によって、この台地の一部には集落跡のあったことが知られるに至った。

今回行われた確認調査では以下のとおりの成果を得た。

確認調査対象面積1,500m²、確認調査面積280m²。

検出された住居址は6軒、溝状遺構1条である。住居址は3mから4mほどの小さなものであり、ほぼ方形を呈し、隅がやや丸みをもつと推定されるもの4軒、直径4m程の円形と推定されるもの2軒である。また溝状遺構は一部分のみの検出でもあり、全容はつかめない。幅90cmを計るが均一ではない。



第10図 青柳台遺跡実測図

4. 遺跡の層序

本遺跡の基本土層は以下の4層に分層される。

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 暗褐色土層

第Ⅲ層 黒褐色土層 暗褐色土を全体的に若干混入

第Ⅳ層 ソフトローム層

住居址等の遺構は黒褐色土が主体を為す。

5. 調査の方法

確認調査にあたって、調査区域内には位置を確定できる基準杭が無かったため、任意に基点を設け、任意の方向に延長して基線とせざるを得なかった。基点から10m単位に方眼を組みグリッド設定した。各グリッドは5mを単位とし東西方向にアルファベットを、また南北方向にはアラビア数字を用いた。

発掘調査は2m×5mのトレンチにより掘削を実施した。各トレンチは1グリッドおきに設定し、必要に応じて補足トレンチ、及び拡張を行った。

6. 遺 物

遺物の出土量は、遺構の検出数から見ると比較的少ないように思われる。総数70点ほどである。縄文時代の遺物は、中期の加曾利E期のものとして、波状口縁の一部、沈線によって区画された縄文の施文された胴部などがみられる。後期のものとしては加曾利B期の遺物が1グリッドにまとまって出土している。

弥生時代の遺物は、本調査区域内からは割合少ないが、工事区域外として現況保存されている部分の試掘から多量の土器が出土している。

古墳時代以降のものは出土した遺物の量からすれば、多いといえるが、大半が小破片であり時期を限定するには至らなかった。土玉1点出土。

7. 小 結

青柳台遺跡は今回が初めての調査であり、その意味では大きな成果を得ることができた。当初、試掘調査により、大きく遺跡の範囲を限定され、集落としての住居址の展開をつかむまでには至らなかった。しかしながら、弥生時代から平安時代の集落がこの台地の先端から米本団地へ伸びる区域に広がっていたと想像され、今後の調査にとって、参考になるであろう。また、今回の調査区域が遺跡の限界を示すものではないことは明らかである。

今後とも、この遺跡の保存が将来に渡って続き、すでに失われてしまった歴史的資料の一助となることが望まれる。

第Ⅲ章 測量調査の概要

1. 佐山台古墳 (第11図・図版10)

佐山台古墳 (分布地図 No. 20) は、埋蔵文化財分布調査の時に佐山台塚として報告されていた塚が改名したものである。

佐山台古墳は神崎川の南岸の台地上に所在している。水田面より低台地へと続き、緩やかな斜面を経て標高23m の台地上へ出る。台地の縁辺部ではないが、それに程遠くない地点に立地している。佐山台遺跡 (分布地図 No. 22) の中に所在している。

周辺部に所在する遺跡も多く、佐山貝塚 (分布地図 No. 12) ・佐山台遺跡などの縄文時代の遺跡群、佐山寺ノ下遺跡 (分布地図 No. 16) ・道地遺跡 (分布地図 No. 18) などの弥生時代後期の遺跡群、松原遺跡 (分布地図 No. 11) ・平戸台南遺跡 (分布地図 No. 26) などの集落址や平戸台古墳群 (分布地図 No. 19) からなる古墳時代の遺跡群と奈良・平安時代の集落址も散在しており、中世に至っては佐山塚群 (分布地図 No. 13) が所在するという多種多様性をみせている。

さて、佐山台古墳は円墳として把握されていた古墳であるが、今回の測量調査により帆立貝式に近い前方後円墳の形状を程していることが判明した。前方後円墳の大凡の主軸線はW-45°-Sとなり、前方部を南西方向へ向けている状態である。主軸線の長さは大凡33m・前方部幅は大凡16m・後円部幅は大凡24m・前方部高は大凡0.9m・後円部高は大凡1.3m を測る古墳である。

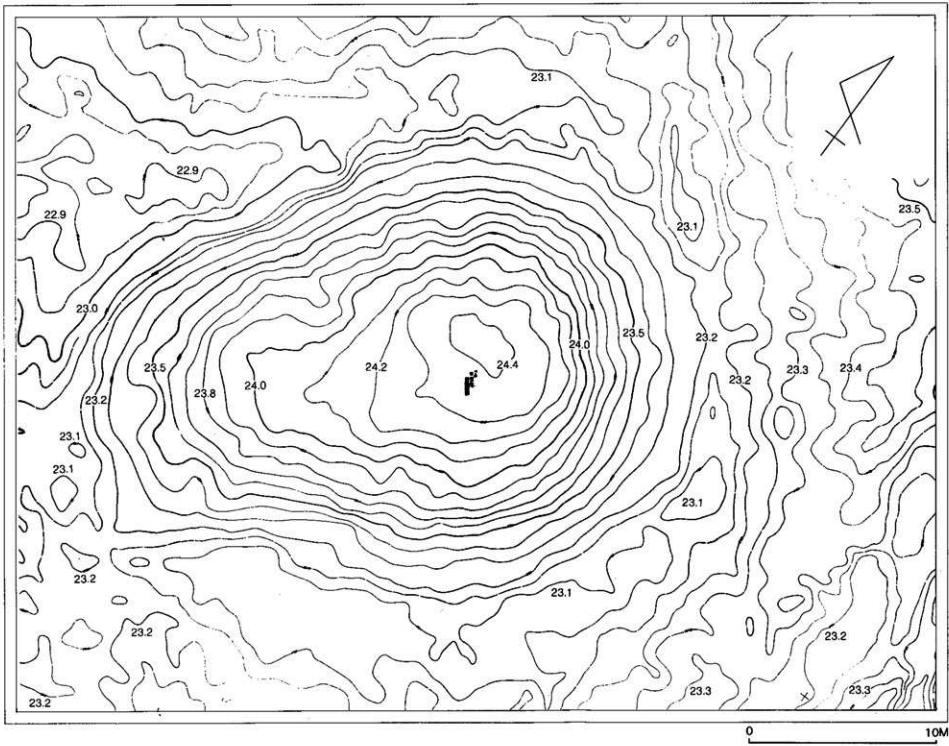
標高数値で言うならば、後円部最頂部のコンタが24.4m・前方部頂部にかかる太線が24.0m・古墳の外周範囲を回るコンタが23.2m である。

今回は測量調査だけであったため、主体部の状況や周溝の有無等については明らかにすることはできなかったが、墳丘より1~2m 離れたところの地表面が少し窪んでいるのが確認でき、また、それが墳丘を囲むようにして一周しているのが認められることから周溝の存在を推定することができる。主体部については確かな情報ではないが、地元の人たちから副葬品の出土を耳にしている。盗掘にあっている可能性が高いのではないか。埴輪片や土器片などの散布は、地表面が下草に被われているためにその存在を確認することは不可能であった。

最後に遺存状態であるが、市内に散在する古墳と比較してみて、特に良好な状態で遺存していると言える。

2. 田原窪古墳 (第12図・図版11)

田原窪古墳 (分布地図内A) は、佐山台古墳より北東方向へ約240m 離れたところに所在する。間



第11図 佐山台古墳測量図 (1/200)

に小さな谷が進入してきているため台地は分かれてしまう。また、田原窪古墳は台地上に立地しているのではなく、台地北側の緩斜面の途中に立地している。佐山台遺跡から分離独立した田原窪遺跡の中に所在している。

周辺部に所在する遺跡については前述したので割愛するが、田原窪古墳から東北東方向へ13m離れたところに塚が1基存在している。この塚も分布地図上には記載されていない新発見の遺跡の1つである。

田原窪古墳は、20mから8mへの比高差をもつ斜面の途中、14.2mから13.0mの地点にかけて構築された円墳である。墳丘の高さは、斜面の上（南東方向）からでは0.6mであるが、斜面の下（北西方向）からでは1.8mを測るものである。主軸線を斜面と同じ方向とするならば、N-27°-Wとなる。墳丘の主軸線による長さは大凡18mを測り、主軸線に直交するラインでは14mを測る。墳丘の形状は円形ではなく、東西方向へ少し押しつぶされたような梢円形をしている。墳丘最頂部のコンタは14.8mである。

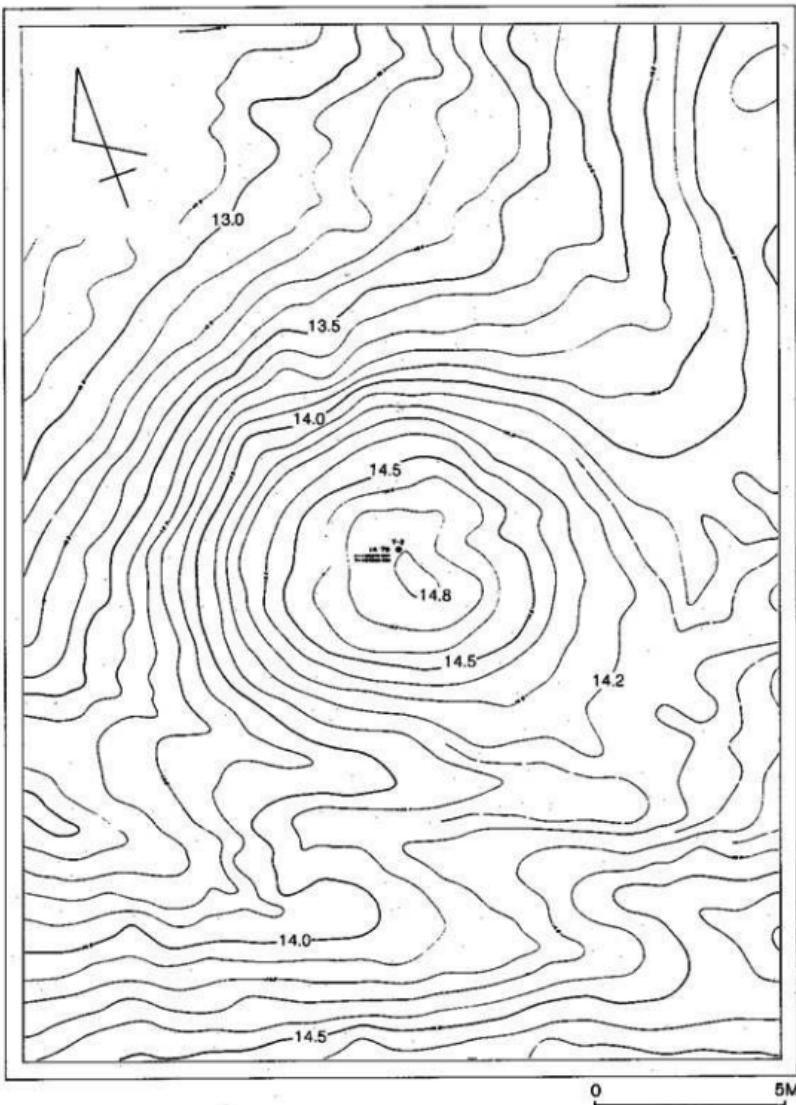
主体部の位置・形状や周溝の有無については今後の調査に負うしかないが、田原窪古墳の遺存状態は佐山台古墳よりも良好であると言える。地表面の観察による埴輪片や土器片の散布は下草等により不明であった。

3. 下高野新山古墳 (第13図・図版12)

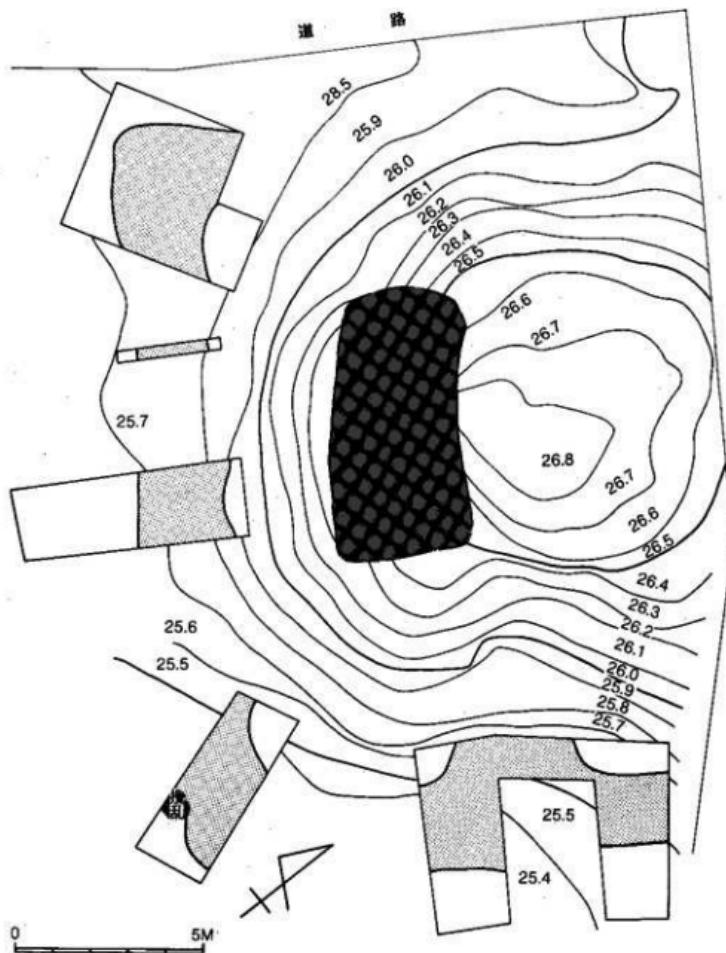
下高野新山古墳（分布地図内B）は、下高野新山遺跡（分布地図No.92）内に所在する。第Ⅱ章中で報告された下高野作畠遺跡にも近接している。東と南に大きな谷・西に小さな谷を望む、舌状台地上に立地しているが、台地縁辺部ではない。標高にして約25mの台地上に立地する。古墳の西側部は道路（未舗装）が走り、北側部の墳丘はすでに耕作により削平されていた。今回測量調査を行った範囲は墳丘の全域ではないが、その全容は円墳を推定することができる。主軸方向を定めることは困難であるが、墳丘の最大幅は北東方向から南西方向へ延びるラインを推定することができ、現存する墳丘長は約16mを測る。それに直交するラインでの墳丘長は約17mを測る。墳丘高は台地上より1.1mを測る。墳丘最頂部のコンタは26.8mである。

主体部の位置については不明であるが、周溝については検出している。地表面の観察にてすでに少し窪んでいる部分を確認していたが、トレンチ掘りの結果周溝と判明した。しかし、墳丘と同じように円形に回っているのではなく、どちらかと言うとはっきりとした角を持つ四角形の周溝を推定することができる。また、南東部にて周溝が少し内側に入っているのも特徴の1つである。このことから円墳以外の墳形となる可能性も高くなるが、今後の調査を待ちたい。

最後に遺存状態であるが、墳頂部南西側に大きな擾乱を受けており良好な状態とは言えない。また、埴輪片の出土は確認できなかった。



第12図 田原塚古墳測量図 (1/150)



第13図 下高野新山古墳図 (1/150)

第Ⅳ章 小 結

本書では、村上宮内遺跡・吉橋城址・村上新山塚群・大山遺跡・下高野作畠遺跡・桑納遺跡（第Ⅱ次）・青柳台遺跡についての発掘調査の報告と、佐山台古墳・田原窪古墳・下高野新山古墳についての測量調査の報告を述べてきたが、頁数等の関係から概報という形を取らざるを得なかつた。各遺跡の詳細なことについては本報告書の刊行を待つてもらいたい。

八千代市内には270余の遺跡が所在することは分布調査等により明らかにされているが、発掘調査等の調査が実施された遺跡はほんの一端でしかない。八千代の遺跡というテーマについて考へるにはまだまだ資料不足であるが、発掘調査のされた遺跡の1つ1つを考察することによりやがてはその全体像をつかむことが可能ではないかと考える。本書にて報告されている7遺跡・3古墳を中心として八千代の遺跡について少し考えてみたいと思う。

村上宮内遺跡は縄文時代前・中・後期と平安時代の遺跡であることはすでに報告されている。台地上平坦部分ではなく谷底部と斜面部分に対して確認が行なわれたため、遺跡の種類については明らかにすることはできなかった。吉橋城址は中世の城址である。南北二つの「郭」によって構成されている。「郭」の外側部分については不明の点が多い。同台地上に所在する吉橋渓内遺跡（分布地図 No.134）の調査（註1）の結果、中世の地下式横穴群と人為的に削平された溝乃至窪地が検出できている。「郭」より南西方向へ約300mくらい離れた所ではあるが、吉橋城に関連する施設の遺構は検出できなかった。吉橋城の中心部分はここまで延びていなかったと考えられる。村上新山塚群は4基（註2）から構成されている。今回調査した塚の周辺部にはそれ以外の遺構は検出できていない。昭和61年度に半壌している塚の周辺部に対して試掘調査が行われたが、同様に塚以外の遺構は検出できなかった。塚群の周辺には集落址等はないようである。大山遺跡は台地上縁辺部に立地する縄文時代早・前・中期の集落址である。同台地上における他の発掘調査例はまだないので本遺跡の広がりや周辺地域の様子など不明の点が多い。下高野作畠遺跡は平安時代の集落址である。またその範囲内には中世の塚5基が存在している。本遺跡の立地する台地上には平安時代の集落址の展開が考えられるが、その広がりは東側方向へ延びているようである。同台地南端部に立地する下高野新山遺跡の調査（註3）の結果、縄文時代早・前期の遺構が検出されており、平安時代の遺構は確認できず土器片の出土もまばらであったからである。桑納遺跡（第Ⅱ次）は縄文時代中・後期の遺跡であるが住居址は確認できず土壇が主を占めている。同台地上に展開する桑納遺跡についてその性格は2分されるようである。縄文時代が中心となる遺跡北西側部分と第Ⅰ次本調査（註4）にて明らかにされた弥生時代後期から古墳時代前期に至る集落址である遺跡南側部分である。青柳台遺跡は弥生時代から平安時代に至る集落址である。

同台地上における発掘調査例はまだないが、先行して行われた試掘調査の結果から、集落址の中心は台地先端部に広がっていると考えられる。

以上 7 遺跡について、隣接もしくは同台地上に立地する遺跡の調査報告を交えながら、その性格等について述べてきた。3 古墳についてはもっと地域を広げて、八千代市全域からみていくこととする。

神崎川流域においては、本書で報告されている佐山台古墳（前方後円墳）と田原窪古墳（円墳）の 2 基が単独にて立地しており、古墳群は形成していない。桑納川流域においては、桑納古墳群（分布地図 No.58・帆立貝式古墳 1 基・円墳 1 基）と追分古墳（分布地図 No.45・円墳）が所在している。桑納古墳群からは人物埴輪を出土している。高津川流域においては、堀場台古墳（分布地図内 C・墳形不明）が所在している。組合せ式箱式石棺を有していた。勝田川流域においては、仲山古墳群（分布地図 No.253・円墳 2 基）が所在している。井野川流域においては、本書で報告されている下高野新山古墳（円墳）のみが所在している。以前は古墳の空白地帯であった。最後に新川流域であるが、印旛沼に近い所からみしていくと、保品栗谷古墳（分布地図 No.76・円墳・基數不明）と神野芝山古墳群（分布地図 No.68・円墳 4 基）が東岸台地の北端部に所在している。神崎川と桑納川に挟まれた西岸台地には、平戸台古墳群（分布地図 No.19・円墳 7 基）と間見穴古墳群（分布地図 No.27・円墳 3 基）が所在している。東岸台地の中央付近には、七百余所神社古墳（分布地図 No.190・円墳）と根上神社古墳（分布地図 No.209・前方後円墳）が所在する。また、村上遺跡群中に墳形は不明であるが村上第 1 号墳（註 5）が所在した。桑納川と高津川に挟まれた西岸台地には、苦地ノ台古墳（分布地図 No.180・円墳）と上ノ山古墳群（分布地図 No.244・円墳 2 基）が所在している。

八千代市内における古墳の立地は圧倒的に新川流域に多くそれも古墳群を形成している場合が多い。他の河川流域には、単独古墳が数基あるだけである。古墳時代における中心地域は新川沿岸地域であったことが推定できるが、今後の調査による古墳時代の集落址の分布状態を待たなければならぬ。

八千代の遺跡について以上のようにほんの一部分の地域で少しづつ明らかにされてきているが、全体的には不明の点が多すぎる。今後の調査に負うところが多く、結論はまだまだ先のこととなるだろう。

註 1 「北部遺跡群緊急発掘調査報告」 八千代市教育委員会 1983

註 2 「村上新山遺跡発掘報告書」 村上新山遺跡発掘調査団 1978

註 3 1986 年に調査され、現在整理中。

註 3 「桑納遺跡」 八千代市教育委員会 1985

註 5 「八千代市村上遺跡群」 財團法人千葉県都市公社 1974

図 版



村上宮内遺跡トレンチ完掘状況



村上宮内遺跡 土層

図版 2



吉橋城址航空写真



吉橋城址 近景



吉橋城址 土層



吉橋城址 発掘風景



吉橋城址 空堀及土塁



村上新山塚 発掘風景



村上新山塚 トレンチ完掘状況

図版 6



村上新山塚 近景



大山遺跡 第6号住居址確認状況



大山遺跡 近景



大山遺跡 完掘風景



下高野作烟遺跡 近景



下高野作烟遺跡 第3号住居址確認状況



青柳台遺跡 近景



青柳台遺跡 住居址確認状況



佐山台古墳 近景（東南側より）



佐山台古墳 近景（南側より）



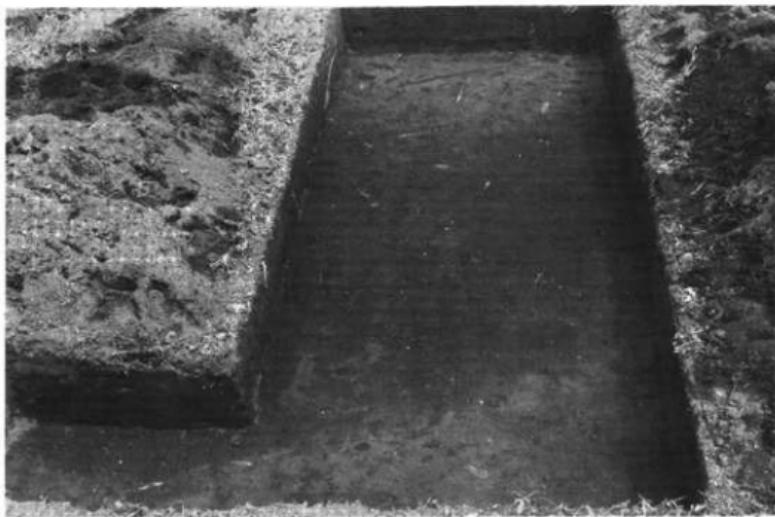
田原塚古墳 近景（東側より）



田原塚古墳 近景（西側より）



下高野新山古墳 近景



下高野新山古墳 周溝確認状況

埋蔵文化財発掘調査報告集

印刷日 1987年3月21日

発行日 1987年3月31日

発 行 八千代市教育委員会

印 刷 物翠松堂